

## 熊本放送

|            |                        |
|------------|------------------------|
| 活動名        | “ 一步にエール ” お話し会        |
| 実施期間       | 令和 7 年 8 月～令和 8 年 2 月  |
| 実施回数       | 会場 3 回                 |
| 配信または貸与期間  | 令和 7 年 11 月～令和 8 年 3 月 |
| 配信または貸与作品数 | 2 本                    |

### 【事業実施の成果・課題】

当初予定していたよりも多い回数（予定：2 回 → 3 回実施）の開催ができ、また、新たな手法に挑戦することができた。

インターナショナルスクールを会場に、海外留学経験のあるアナウンサーを派遣したケースでは、日本語と英語、2 言語同時での朗読に挑戦。アナウンサー自身に貴重な経験であったと同時に、子どもたちも普段は「英語だけ」「日本語だけ」で絵本を読んでいたことから新鮮だったという感想を得た。

特別支援学校では学校が所有する大型絵本を活用し、参加型の朗読を試みた。「ただ聞かせられる」だけでなく、声を出すことの楽しさを感じてもらうことができた。

また、全体を通して大切にされたのが“生活につながる作品選び”と“ふるさとを愛する心”である。

朗読する作品は、できるだけ熊本にゆかりのあるもの・熊本が舞台の物語を選んだ。

高森町を舞台にした「草原の小さな宝物」は、熊本・阿蘇の雄大な自然の成り立ちとそこで暮らす生き物や人々の営みを学べる作品。

一方、熊本市動植物園を舞台にした「どうぶつたちもこわかった」は、2016 年に発生した熊本地震の被害とそこからの復興を描いた実話である。朗読の前後には作品の舞台となった場所の紹介や物語の背景、実際に足を運べば新たな発見があることを伝えた。

特別支援学校において使用した「スイミー」は、学校が大型絵本を所有していながら児童たちにはあまり読まれていないことを事前に知った。そこで、身近なところにも新たな物語との出会いがあること、そして「誰が読むか」、「誰と読むか」で異なる楽しさが生まれることを伝えた。

「絵本を読んで、楽しかった」で終わらない、今後の暮らしにつながる時間を目指した。

### 【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

＜亀山真依アナウンサー＞

ただ言葉をなぞるだけでは子どもたちを“引き込む”ことは難しいことを肌で感じた。それだけに「伝える」「伝わる」喜びを肌で感じる事ができた。また、普段の放送における言葉づかいや話す速度に

についても、まだまだ工夫の余地があることを再確認する機会となった。

#### <福居万里子アナウンサー>

熊本地震をテーマとした物語は保育園児には難しいかもしれないし、退屈させるかも…という迷いもあった。しかし、園児の中には「あんばんまんよりも動物園のお話が心に残った」と言ってくれる子もいて、非常にうれしく思う。熊本地震後に生まれた子どもたちではあるけれど、近年はどの保育園でも地震を想定した避難訓練が本格的・定期的に実施されていて、そうした園生活ともリンクしたようだ。防災意識や郷土愛を育てる側面も大切に、今後も作品を選び、活動を継続したい。

#### <丸山丈瑠アナウンサー>

普段の業務はスポーツ取材中心のため、高校生以上の年代との関わりが多い。今回は小学生という“若い視聴者”と交流できたことを非常にうれしく思う。また、発声練習をはじめとした参加型のプログラムにしたことで、子どもたちのエネルギー・記憶力・応用力など、想像していた以上のチカラを感じた。

### 【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

#### < KASUGA よんちょうめ保育園 >

同じ物語でも保育士とアナウンサーとでは表現がまるで違うことに驚いた。どちらが良い・悪いではなく、何を大切にしているかという視点が異なるようだ。例えば、保育士は“想像する力”を育てるために、過度な演技をせず、あえてフラットに読むことがあるが、アナウンサーは文章の要点が分かりやすくなるよう声の強弱や話す速度を巧みに変えていく。違うからこそ子どもたちには新鮮だったようで、普段と違う反応を見られたことを嬉しく思う。

#### <エミルインターナショナルスクール>

普段は「日本語の本は日本語で」「英語の本は英語で」とひとつの言語でしか本を読まない。2言語同時の読み聞かせは初めての試みだった。それぞれの表現の違いを感じながら物語を読み進めるという良い経験となった。

#### <熊本大学教育学部附属特別支援学校>

特別支援学校という特性上、児童の中には発語が不明瞭な子もいるため、表情筋をほぐすとか、はっきり言葉を話す訓練につながる内容をリクエストした。発声練習を取り入れたプログラムでは教員も驚くほどの声量が出ていたし、朗読中は物語を集中して聞けていた様子から特別な時間になったことと思う。